美少女になって生まれ変わったら周りが全員美少女な件について

生後一ヶ月で課長になった男

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男がＴＳして美少女系アニメに転生する感じの稀に良くある感じのアレ

目次

You make me feel so bad ―― 1
夜な夜な夜な ―― 6
スモーキンレイニーブルー ―― 12
きらきら星 ―― 18

Ｙｏｕ ｍａｋｅ ｍｅ ｆｅｅｌ ｓｏ ｂａｄ

唐突だが、とある男の話をしよう。
その男は、まぁまずまずといった容姿と能力、そして少々偏った趣味を持ち合わせていた。
こと現代の日本においては一般的というレッテルを貼り付けられやすい人種であり、かと言って弛まぬ努力によって何かしらの功績を残そうとした訳でもなく、単純に言葉で表せば「平凡」だ。
そんな彼が大した目標を持たないままに、高校生活の、余りにも自由過ぎてむしろ束縛すら感じるような時間を無気力に満喫していた頃、その瞬間がやってきた。
ボーッと道を歩いていた彼が最期に見たのは、自分に顔を向けているトラック。
端的に言うと、彼は死んだ。
本来なら話はそこで終わりである。ああ、なんとも不運な事だと一言投げかけられるだけで済むような、取るに足らない話。
だがしかし、彼はその後、いつの間にか何処かに立っており、一つの人らしきモノと対面していた。
ソレはこう言った。男を別の世界へ生まれ変わらせる、と。
それは現代日本のポップカルチャー界隈で人気の、転生というやつではないか!?という極めて論理的な推測により産み出された結論によって、彼はソレを仮に神と呼ぶ事にした。
更にテンプレートな事に、一つだけ思い通りの能力なり道具なりを贈ってくれるとの事、これには男も大歓喜した。
そして彼が何と願ったか、それが、
「美少女にしてください！オナシャス！」
コレである。
彼にはとある願望があった。それがこの、美少女になる事だ。
傍目から見て余りに愚かだが、心が広いのか意外とこういう要望が多いのか、神は一切の躊躇もなく了承した。
そうして彼は転生し、二度目の人生を幸せに過ごした、なんて事は

無かった。
もう一度言うが、彼は平凡である。それ故に前の人生では大した事もせずに、無気力なままに人生を終えた。
そんな彼が、容姿が変わったというだけで急に物事に意欲的になるかと聞かれれば、答えは否である。
というより、なまじ小中学校等は既に経験済みなのもあって無気力さに拍車がかかり、結果、前回では少なからず居た友達も最早少ないとも言えない程の数しか作れず、一番の友達は深夜アニメであるという状態。
更に言うのなら、容姿だって特別優れたものではない。
この世界の女性は軒並みレベルが高く、ちょっと街を歩いてみれば美少女なんてすぐに会える。
むしろ、生まれてきてからなんのケアもしていない分、劣っているのではなかろうか。
つまりは、前回と何も変わっていない、否、悪化しているのだ。
そして、そんな彼もとい彼女は、何を隠そう散々顛末を語ってきた私である。

ああ、正直に告白しよう。私は人生を舐めていた。
自分が平凡なのは容姿が平凡だからであると思い込んでいた節があるのは否めない。私はどうしようもなく愚かであった。
まぁ、かと言って今更どうしようもないというのもまた事実。結局、私は私であるというだけの話だ。
それに、今日からはなんと！高校が始まるのである。
高校生活、それはいわば青春というものの代表的スポットと言えるであろう。多くの人はここで恋をしたり、部活に励んだり、なんか特別な集まりを作って絆を深めちゃったりしているのだろう。
いやまぁ、実際に体験した事はないし、内心では、そんなまさに青春と言った感じのイベントなぞ、ある筈も無いと思っているが。
しかし、希望を抱くだけならば自由。実行に移さないのならば、どんな妄想をしてもＯＫです。

耳をすませばのような恋愛は本当にあるかもしれないし、テニス部は皆何かしらの能力を持ってるかもしれないし、何処かの学校では文芸部が乗っ取られてＳＯＳ団なるものが出来上がっているかもしれない。

そう、未来は無限大、だって可能性感じたんだ。いっそ思いっきり悪目立ちする方向性でも良いのではないだろうか。

なんだコイツおかしいな、という風な感想を引かれない程度に抱かせて、交友関係を築く。考える程名案な気がしてきた。

そうして、私は明日へ進む為の一歩を踏み出した。

「皆さんこんにちは！戸山香澄１５歳です！」

一歩目から躓いたでござるの巻。

なんだコイツは、強烈過ぎる。何故年齢を言っている。ここに居る全員同い年だろ。

いかん。これはいかんですよ。題して「へっ面白ぇ女だ」作戦を実行すれば良くて苦笑、最悪、初日から教室中を凍りつかせた女として名を馳せてしまうだろう。

「キラキラ、ドキドキしたいです！」

終わった。二重の意味で。今もほら、可愛いなんて感想を苦笑混じりに呟かれているではないか！大体、星の鼓動ってなんだ？素敵ワードすぎる。しかも言った後に小首を傾げてる辺り、コイツ天然だ。

無理、これには勝てない。これの後で印象付けるのは唯でさえ至難の技であろうに、私はよりによって、

「名城智（なしろさとり）です。趣味は……」

その、直後であった。

「やっぱり、地道にやるしかないよね」

人生に楽な道はない。そんな事はこの二回目が始まってから嫌というほど思い知らされてきたではないか。故に私はめげない。

別に、ここで友達を作ってしまっても構わんのだろう？という訳で初対面なのにいきなり一緒に下校するという、割と日常系アニメなんかではお馴染みなような気がしなくもない手段を取ろう。

そう思い、席から立って周りを見てみるが、なんと、誰も彼もが早速徒党を組んでいて、最早一人だけなのは私のみという勢いである。
どうしよう、普通に寂しい。
自分だけ一人なのはどうしても嫌だったので諦め悪く探してみると、居た。名前は確か、花園たえ、だった筈だ。正直、戸山さんの自己紹介が強烈過ぎて、名前以外、殆どどんな人物なのか分からない。
それでもやっとの思いで見つけた同士、ここで手放す道理はないが、しかしそれは些か自分勝手ではなかろうか。所詮、このシンパシーを感じているのは私だけだ。
彼女の立場で見れば、私は一秒たりとも視線も言葉も交わらせた事の無い相手。そんな奴が急に一緒に帰ろうと誘ってくる。不気味というほかない。
泣く泣く私は諦めた。同じく一人で帰る人が居る、それだけでこんなにも心が救われている。自分の身勝手さに少し泣きそうになる。

家に帰った私はなんとなくギターを弾くことにした。なんとなくである。決して友達作り用に作戦を考えるも、行き詰まったからその気分転換に、なんて事は決してない。
半ば物置のようなその部屋にそのギターは眠っている。所謂、アコースティックギターというやつだ。元々は姉の物であるのだが。
姉という女は、まぁ平凡と言うに相応しい人物であった。それが何を血迷ったのか、高校に入った途端、急に音楽をしたい等と言い出した。
そうして必死に働いた姉が、バイト代と多少のお小遣いから苦労して買い上げたのがこのギターという訳だ。
私はギターを携え、暫く考える。
「……アレにしよ」
『Ｙｏｕ　ｍａｋｅ　ｍｅ　ｆｅｅｌ　ｓｏ　ｂａｄ』個人的にかなり好きと言うのもあるが、この曲を選んだのは単純に、久しぶりに姉の顔を思い出したからだろう。
「煙草の吸いがらが燃えている　空気清浄機のフィルターに反応して

しまう」
私にとって姉という存在は不愉快であった。その平凡ながらなんの努力もせず、ただ日々を無為に過ごす様が、まるで私(俺)のようで醜かった。
「思い出して　更にムカついて」
そんな姉がドヤ顔でギターを持ってきた時は苛立つと同時に、何処か自分が感動しているのが確かに分かった。
「思い出して　更にムカついて」
ああ、ちゃんと目標が出来たじゃないかと、それがどんな些細な事でもちゃんと見つけられたと言うのが私には無性に嬉しかったように思う。
「二度と会いたくない」
そしてそんな姉は、ギターを買って半年もしない間に死んだ。
「Ｙｏｕ　ｍａｋｅ　ｍｅ　ｆｅｅｌ　ｓｏ　ｂａｄ」
いつだって、あなたは私を不愉快にさせる。

夜な夜な

さて先日の、ちょっと痛い系女子を演じて交流を試みる、という計画を天然という最大にして最強の障害に台無しにされた私は無論の事、あらゆる方向性から未来の友達候補へコミュニケーションを試みていた。

そう、私はここ数日、ずっと他人とのコミュニケーションについて研究していたと言っても過言ではない。それくらいの心意気で私は対話に挑んでいた訳なのだが、どうにも結果は芳しくない。

何故だか知らないが、私が幾らにこやかに話しかけようとも何処かぎこちなさを感じるのである。

これはもしや会話術以外の要因があるのでは、と思い至り、早速情報を収集、というか昼休みにトイレで偶然会話を聞いたところによると、曰く、ずっと無表情で、中学の頃から話しかけづらい印象があったとか。

「表情……かぁ」

盲点でござった。そりゃあぎこちなくもなりますわ。

相手にしてみれば、眉一つ動かさない癖に会話には偉く積極的に参加してくるのである。これは怖い。

いやあんまり鏡とか見ないしね。こう、まさに愛想を体現している！って感じの表情を常にしているつもりだったのだが、まさか全くもって出来ていないとは。

なんにせよ、このままではダメだろう。ひとまず表情筋を動かすという事を知らなければ！

「かたっ」

めっちゃ堅い。私の表情筋、テコでも動かんと言った感じだ。何とか笑みを作っては見ても、なんかこう、曲げてはいけないところを曲げている感じがある。

おかしい。前回ではここまで意識せずとも笑顔の一つや二つ作れた筈なのだが。

こうなれば最終手段、名城式スマイル術を実行せねばならないだろ

う。仕組みは単純、人差し指で頬を持ち上げれば良い。
「むぅ」
中々に不細工ではあるが一応笑っているようには見える。後はこの形を維持したまま……とそこまで思考した瞬間。
「名城さん？」
私は一瞬で真顔になった。

「笑顔の練習？」
と、そう訊いて来るのは先程、私が醜態を晒したばかりの山吹紗綾である。
「そう」
結局、大方話してしまった。
あの状況ではどう足掻いても言い訳出来ぬで候。せめて「かたっ」とか言ってる時なら良かったのに。ままならない。
「変かな？」
「いやぁ……ただ、ちょっと意外かなーって」
意外とは、それこそ意外である。
多かれ少なかれ人とは他者と交流したくなるものだ。その為の練習というのは、不自然であっても不思議では無いと、私なんかは思うのだが。
「名城さんって、なんか自分から一人になってるってイメージ勝手に持ってて。ごめん……」
「いや、別に気にしてない」
それについては自分でも心当たりがある。
非常に不愉快ながら、姉の死というのは存外、私の精神にショックを与えたらしい。
中学生の頃、姉が死んでから暫くの間、私はどうにも他人との付き合いというものを鬱陶しがっていたのだろう。
「それで、友達作りだっけ？」
「当分の目標」

結局の所、自分で蒔いた種という事だろう。ならば尚のこと、私が努力せねばなるまい。
「とりあえず、練習を続けようと思ってる」
「笑顔の？」
「うん」
「無理しなくても、普通に話してればそのうち皆慣れそうだけどね」
「私としては、もっと円滑に事を運びたいと言うか……」
それにこの、前まで出来た事が出来なくなっているというのは、個人的に少し具合が悪い。
まるで『前の自分』という存在が自分の中ですら消えかかっているような気がしてきて、恐ろしくすらある。
未だに未練じみたモノを抱えているらしい自分に、内心では苦笑してみせたものの、成程、ぴくりともしていない。
「うーん」
「どうしたの？」
「いや、苦笑いしたつもりだったんだ」
「そ、そうなんだ？」
こんな事を話している間にもうじき教室である。
私が山吹さんに時間を取らせてしまった事を謝罪しようとした、その時であった。
「あっ！さーやと……名城さんだ！」
そう私達を呼ぶ声がしたのは。

戸山香澄と山吹紗綾は仲が良い。確か初日にはもう一緒に帰っていた筈だ。さぞかし付き合いも長いのだろうと思って訊いたのだが……
「ううん。さーやと私、会ったの入学式の時が初めてだよ？」
え、なにそれこわい。これは戸山さんの社交性に驚くべきなのか山吹さんの寛容さに驚くべきなのか。
「それはなんか、凄いな」

「あはは……」
「そうかなぁ？……あ、そうださとりん」
「さとりん？」
　なにその幻想感溢れるフレーズは。
「え？だって、さとりだよね？」
「うん」
「だからさとりん！」
「あぁ……うん、そうだね」
　もうそういう事でいいか。私は今、ここが前とは違う世界であるという事を痛感していた。
「そうそう！それでね、さとりんはなにか部活、入るのかなって」
「部活は……」
　率直に言って興味は無い。放課後にわざわざ残って何かするくらいならアニメを見るなり何なりしたい、というのが私の意見である。
「どこにも入らないかな、多分」
「そっかぁ……さとりんもかぁ……」
「も？」
「あぁ、私も」
「なるほど」
　山吹さんも同士だったとは。いやまぁ、私のように単純に面倒だからなのかは分からないが。
「そういえば香澄はもう決めたの？部活」
「それがまだ……」
「戸山さんは探し中なんだ」
「うん！剣道にテニスに将棋とか……色々見てみたんだけど、どれも全部楽しそうで……決められないんだよね」
　それは大変アクティブで結構な事だ。彼女はきっと今が楽しくて仕方ないのだろう。私には、どうにも真似できそうにない。
「まぁ、焦らなくても大丈夫じゃないかな。」
「え？」
「うちの姉なんか、高校になってから急に音楽がしたいーなんて言っ

てギターまで買ったくらいなんだし。」
「音楽……」
「そう、だから……うん、戸山さんのやりたい事、きっとすぐ見つかると思う」
なんとも投げやりな助言であると自分でも思うのだが、実際、「やりたい事」なんて急に見つかる物だと私は思う。
何故かと根拠を尋ねられると困るのだが、強いて言うのなら、そう、私が未だに、姉が音楽を始めようと考えた理由を全く知らないからだろう。
あんなにも無気力であった姉が急に音楽に目覚めたりしたのだから、その気に満ちている戸山さんに「やりたい事」が見つからない筈もないだろう。彼女はそれぐらい、輝いている。
「さとりーん……！」
「ちょっ」
急に抱きつかれるのはびっくりする。
「……戸山さん、あの」
「香澄でいいよ！」
それはちょっとハードルが高すぎませんかね。

結局あの後、香澄と共に紗綾まで名前呼びする事になった。交友関係が一気に二人も増えた事は喜ばしいのだが、やはり少々気恥ずかしいものがある。
それにしても、
「やりたい事か」
なんとも説得力のない事を言ってしまった。前回が高校生までという短い期間だったとはいえ、二回もの人生を経験しておいて、私はやりたい事なんて一つも見つけていない。
「違うな」
正確には、見つける努力もしてこなかったのだ。
別に、自分以外にこんな人間が居ないとは思っていない。むしろ、

過程はどうであれ、やりたい事が無いなんて有り触れているのではないだろうか。
しかしながら自分の場合、なんの努力もしてこなかったというのが致命的である。そのせいで私は、なにもしていないのに自身の無意味さを嘆くという、この世で最も傲慢なる所業をしているのだ。
本来死ぬべきは姉ではなく私の方ではなかったかと、たまに思う。
駄目だ。どうにも夜は自己嫌悪に陥りがちである。今聴いていた曲のせいだろうか。
「お風呂入ろう」
こういう時は気分転換をするのが一番良い。

「バンドやるんだ！」
次の日の朝、教室へ向かう途中で香澄がそんな事を言った。
どうやら、彼女は早速見つけたらしい。

スモーキンレイニーブルー

今朝、偶然にも紗綾と下駄箱で出会い、一緒に教室へ向かっていた途中で香澄とも出会ったのだが、どうにも香澄のテンションがおかしい。聞けば、バンドをやるとのこと。

昨日の今日で一体何があったというのか。

「ライブハウス行ったらすっごくキラキラで！ドキドキして！さーやもやる？放課後ダメなら休み時間に……」

「私はいいよ」

「はぁ……そっかぁ……さとりんは？」

「ごめん、私も……」

「えぇー……」

正直、自分がバンドをやる姿が想像出来ない。一応、楽器が無い事もないが、アレを使うというのは少し違うような気がする。

「見つかったんだ。キラキラドキドキするもの」

「……ホントだ……！」

キラキラドキドキとは、確か香澄が自己紹介の時に言っていた言葉だったろうか。それを指摘された香澄は感極まったらしく、紗綾に思い切り抱きついていた。

こんな風に喜べるというのは、少し羨ましい。

私はそこまで喜ぶような経験をした事が無い。少なくとも記憶に残っているようなものは……ああ、でも、一つだけ、何かあったような。あれは確か……

「さとりん！」

「……あ、うん」

「どうしたの？」

「いや、なんでも」

何だっただろうか。きっと大した事ではないのだろうけど。

「ごめんさーや！今日ちょっと先行ってて！」

などと言って香澄が慌ただしく出ていったのは、丁度四限が終わった直後であった。
「なんだろ？」
「バンド関係とか」
「ま、いいか……あ、そうだ、智も一緒に食べる？お昼」
「いいの？」
「いいよ」
「じゃあ、遠慮なく」
そういえば、お昼に誘われたのはこれが今世で初ではなかろうか。
かなり嬉しい。嬉しすぎて妙な顔を晒してしまうかもしれない。
いや、表情筋は未だピクリともしていないが。
中庭にあるベンチに座って紗綾と二人で香澄を待つ。
ふと、紗綾の持っている袋が目に付いた。
「やまぶきベーカリーだ」
「あぁ、ウチの店なんだ」
「……だからやまぶきか」
「うん」
それは全く知らなんだ。名前だけは聞いたことがあるのだが、機会が無く、一回も足を運んだ事がない。私が出不精なのもあるだろうが、というかそれしかない気もする。
「でもなんか、いいね」
「そう？」
パン屋のパンというのに、なにかこう、特別感のようなものが感じられるのは私だけだろうか。今までコンビニの菓子パンか食パンぐらいしか食べた事がないので余計である。
「そのうち行くかも」
「ご来店お待ちしてます」
「店員？」
「一応、毎日手伝ってるしね」
「おぉ…」
私とて皿洗いや掃除ぐらいは流石にするが、そう毎日手伝うという

のは経験が無い。私ももう少し両親を労るべきか。
「智のは？」
「んー……一応、私のお手製？」
「へぇ、手作り？」
「いや、お米以外全部冷食」
「……お手製？」
「違うか」
　最近の冷食は美味しいし、楽だから、まぁ多少はね？
　そこまで話をした所で、ようやく香澄が合流してきた。
　何故か牛込さんを連れて。
「一緒にバンドやるの！」
　凄く良い笑顔で大変結構なのだが、牛込さんが驚いているように見えるのは気の所為だろうか。
「りみりんすごいんだよ！……なんだっけ？」
「ベース？」
「ベースが出来る！」
「ちょっとだけだよぉ」
「ちょっとでもすごいよ！」
　まぁ、確かに楽器経験者は貴重だろう。
　そう考えると香澄は中々に幸運かもしれない。いや、牛込さんの様子を見るに、本当に加入を了承したとはとても思えないが。
「牛込さん、嫌なら断っても良いんだよ？」
「ヒドイ……」
「あははっ」
「りみりーん……」
「いややっ……イヤじゃ、ないよ？戸山さんが誘ってくれて、私……」
「……！りみりーん！」
　最早香澄にとって抱きつくという行為は挨拶か何かなのだろうか。このコミュニケーション能力は私も少しばかり見習うべきかもしれない。
　しかし、そうなると私もほぼ初対面の人間に対して抱きつくぐらい

の積極性を持つ事になるのか？
「……ないな」
「ん？なにが？」
「いや、アレは香澄にしか出来ないなって」
まさに生きている世界が違うという感じだ。

その後に知ったのだが、どうも香澄が気に入ったというギターはランダムスターという名前らしかい。
星に惹かれたのだろう。そこの辺りがどうにも香澄らしくて笑ってしまう。いや、実際には表情が動いていないのだったか。
「ギター……」
そういえば、姉はどうしてあのギターにしたのだろう。いや、特に理由なんて無いに違いない。あれはそういう人だった。
こうやって姉について考える時間ほど無駄なものは無いと悟った私は、大人しく眠る事にした。幸い、最近は良く眠れるのだ。

「あ、弦……」
「げん？」
「なんでもない」
香澄が良くギターの話題を出すからだろうか、偶然にも面倒な事を思い出してしまった。
アコギの弦がそろそろ替え時だったような気がする。別に毎日弾くわけでもないのだから、わざわざ替えなくてもいいとは母に言われたが、それは、なんとなく嫌だった。
大抵眠っているとはいえ、折角置いてある以上、替えないというのも勿体ない。そう、勿体ないだけ。
死んでからもこんな面倒を遺すとは、やはりあの姉は碌でもない。
しかし、替えるのは良いとして、弦は楽器店にでも買いに行くという事になるのだが。

「雨かぁ……」
「さとりん、雨嫌い？」
「あんまり」
濡れるし、傘は邪魔くさいし、蒸し暑いしで良い所がない。
わざわざ今日買いに行かなくても良いのではと思いもしたが、思い立ったが吉日と言う事である。私は結局、面倒な姉の後始末をさっさと済ませることにした。
だがしかし、一旦家に帰ってから外に出るのは億劫である。普段、金などその日の飲み物代程度しか持ち合わせていない私は、帰る途中で買って帰るという効率的な手段が取れずにいた。
ますます今日弦を購入する必要性が無くなったが、どうせ家に居ても娯楽に耽るのみであるのだから、いっそ外に出た方が些か健康的であろう。そう、これは一周半回って効率的なのだ。
という謎の発想によって、今、私は商店街の方に向かっている。我ながら馬鹿だ。
いつもの如く、電車に揺られながら音楽を聴く。なんとなく選んだその曲は、姉が好きだったユニットの曲で、彼女がしつこく勧めてきたアルバムの中で一番良いと感じたのがコレだった。
姉は確か「さいごのひ」だったろうか。予想通り過ぎて笑ってしまった覚えがある。
思えば姉とは音楽の趣味が全く合わなかった。
私が推しても姉の受けは悪く、姉が勧めてくるものは尽く微妙である。銀杏ＢＯＹＺを否定されたのは未だに許せない。
その割にはアニメに関しては不思議と意見が一致する事が多かったり、妙な所で気が合ったものだ。
そんな事を思い返していると、いつの間にか目的の駅に着いていた。
彼女について思考するのは無駄だと、一体私は何度悟れば良いのだろう。あまり、振り切れていないのかもしれない。

もう既に日は落ちかけていて、未だ降りしきっている雨の事もあり、人通りはかなり少ない。
私が向かうのは江戸川楽器店、姉がギターを購入した店である。
「おーいらっしゃい。久しぶりだね」
「どうも」
この店の店員である鵜沢リィさんは、とあるバンドのベースをしているらしい。姉とも多少付き合いがあったらしく、買ったのがこことというのもあって、ギターに関する事は大体ここで済ませている。
ちなみに鵜沢さんは常に妙な人形を弄っているが、個人的な感想を述べさせてもらうなら、どことなくおっさんっぽくてあまり可愛くない。
「今日はどした？」
「弦がそろそろ替え時かなと思いまして」
「ほいほい、じゃあ……」
等と話している最中、後ろで子気味良い音が響いた。
まさかこんな天気と時間に楽器屋へ来る奴が他にいるとは、どういう輩かと見てみれば、なんとそこにはギターケースらしきものを誰かと二人がかりで持っている我が友の姿が。
「落としちゃって……」
別に彼女と特別仲が良い訳では無いが、ソレは私からしても、普段の彼女からしてみれば有り得ない事だった。
それぐらい私の中で戸山香澄という人間は、いつでも明るかったのだ。それこそ、不安などという言葉とは無縁なほど。
しかし、どうだろう。
「修理お願いできますか!?」
そう訊く彼女の顔ほど不安を体現しているものはきっと今、他にないだろう。

沈黙が痛い、というのはこういう事だろう。
事情を聞くに、どうやら香澄がギターを落としたということらしいが、ケースを見ると取っ手が付いていなかったので、おそらく持ち上げた拍子にケースが壊れたと言うのが正しいだろうか。
香澄は相当ショックだったらしく、いつもでは考えられないほどに口数が少ない。
その結果がこの沈黙である。
流石にこの空気の中、初対面の市ヶ谷さんと親交を深めるというのは中々に難しいであろう。
何かこう、気の利いた言葉を香澄に掛けられれば良いのだが、生憎と他人を励ました事など、数えるまでも無い。
私は弦を買いに来ただけなのに、どうしてこうなった。
「……ごめん」
香澄がそう呟いた。
ケースの状態的に、香澄に非は無いと思うが、単純にギターを壊したという事が響いたのだろう。
「大丈夫でしょ」
市ヶ谷さんがあっさりとした風で返すが、実際そこまで深刻な事にはなっていないだろう。弦が切れただけのようだし、今すぐにでも終わるはずである。
などと考えていたら、ちょうど鵜沢さんの声がした。
どうやら、無事に終わったようだ。
代金を払って二人と店を出る。
香澄はギターを大事そうに抱き抱え、実に安心した表情をしている。余程気に入っていたらしい。
「良かったね、ギター」
「うん！ホントに……」
「さて……じゃ、そろそろ帰るよ」
「あ……ごめん、付き合ってもらっちゃって……」

「大丈夫、放っておくのもアレだし」
あのまま帰るのは少々寝覚めが悪いというものだろう。
「じゃあまた明日、市ヶ谷さんも」
「は、はい」
「さとりんありがとー！」
香澄に手を振り返しながら安堵する。
あの調子ならば、きっと明日にはいつも通りになっている筈だ。やはり彼女は笑っていた方が良い。

「市ヶ谷さん？」
今朝、紗綾と一緒に教室へ行くと、市ヶ谷さんが居た。香澄の様子を見に来たのだろうか。
「昨日ぶりだね」
「げ……ご、ごきげんよう」
昨日の言動とは打って変わって上品な挨拶をすると、そそくさと歩き去ってしまった。
「知り合い？」
「昨日ちょっと……そういえば香澄は」
カーテン越しに誰かへ抱きついていた。声から察するに牛込さんだと思われる。
「……いつも通りか」
「だね」
この行動をいつも通りで済ませるというのはどうかと思わないでもない。しかしまぁ、この場合は彼女が元気になった事を喜ばしく思うべきだろう。
それにしても、一体どうしてこんな珍妙な事になっているのか。
などと思いながら様子を見ていると、牛込さんが目を回して倒れていた。
「りみりん!?」
「牛込さん!?」

「大丈夫？」
「ごめんなひゃい……」

結局、本当に目を回しただけらしく、大事は無かったのだが……
「牛込さん、来ないね」
「むぅ……」
何処へ行ったのか、昼休みに彼女の姿は無かった。
どうも香澄を避けているように見えるが、彼女自身は腑に落ちない風である。
「なに唸ってんの？」
聞こえてきたのは今朝も聞いた声だった。
「ありさ！」
香澄は嬉しそうにそう呼ぶと、満面の笑みで自身の隣を手で叩き、露骨に示す。
対する市ヶ谷さんは、この誘いを完全にスルーして私の隣に座ってしまった。それは少しばかり可哀想じゃなかろうか。
「契約結んだんで」
「ありさが一緒に食べたいって」
「言ってねぇ」
「言った」
「そういう言い方はしてねぇ」
ふむ、なんというかこれは、思ったよりも……
「仲良いんだね」
「へぇ……」
「仲良くないです！」
ツンデレかな？
「ありさどうしよぉ！」
「なんだよ……」
「りみりんだよ。なんでバンド駄目なんだろ……」
つまり、牛込さんは何かしらの理由でバンドが出来ず、その理由が

関係しているのか、単純に断るのが後ろめたいのか、香澄を避けているのはそういう事なのだろう。
しかし、香澄によるとはっきりと断られた訳ではないらしく、どうすればバンド加入してくれるかを市ヶ谷さんに相談していた。
が、ドライな反応で返された香澄は、どれだけ案が欲しかったのだろう。ソレを箸でつかみ、
「卵焼きあげるから！」
よく分からない交換条件を持ち出した。
「これは……よくあるおかずの交換ってヤツ……？」
「ぷふっ」
紗綾は吹き込んだが、私としては気持ちが分からなくもない。友達というものが少ない身分としては、そういった小さなイベントにこそ憧れてしまうのだ。
「交換してもいいよ？」
「しない！」
「なんで？」
「しねーよ！」
「あげないよー？」
「いらねーし！」
しかし、彼女はそう素直に喜べないらしい。
「ふふっ……ごめん、カワイイ」
「うん」
「可愛くないです！」
市ヶ谷さんには悪いが紗綾と同意見である。

結局、牛込さんを上手く誘えたのかは定かでない。しかし、翌日の彼女らの様子を見るに、上手くは行かなかったのではなかろうか。
流石にバンドをしないまでは行かないだろうが、あれだけ熱心に誘っていたのだ、多少堪えているかもしれない。
少しだけ彼女を心配していると、当の本人からとある誘いが来た。

一緒にライブを見に行かないか、というものだ。

「今日、出掛けるから」
「珍しい。何しに行くの？」
「友達とちょっと」
何故そこで愕然とするのか。
「……友達？」
「うん」
「友達……そっかぁ……母さん嬉しい！」
「大袈裟」
何故友達が出来たくらいでそこまで喜ばれなければならぬ。
別に中学時代に友達が全く居なかった訳ではない。が、確かに荒んでた時期には全然だったか。
中学の娘が友達も作らず、毎日ギターに執心している様は、親としては気が気でなかっただろう。
あの時は、ただひたすらに逃れようとしていた。今でも、時々その感覚を思い出す事がある。
おそらく、そこからだっただろうか、はっきりと姉が嫌いであると感じたのは。
「智？」
「あ、うん」
「大丈夫？」
「大丈夫……」
要らない事を考えてしまった。
折角友達と出掛けるという時に、こんな事を考えずともいいだろうに。
「そうだ」
今日は珍しく外出するのだし、思い切ってアレを試してみるとしよう。
二階に上がり、自室へ入る。遂に、長年クローゼットで眠っていた

アイツを解き放つ時だ。
それは、そう、スカートである。
姉から押し付けられて以来、手を触れてすらいない。まず、私服でスカートを履いた事も無かった。
正直、制服は仕方ないとして、私服でスカートを履くのは少しばかり抵抗を感じるのだが、一度も触れないというのも勿体ない気がした。
周りがいちいち美形なのであまり実感が湧かないが、私は曲がりなりにも美少女である。きっと見苦しい事にはならないと思いたい。
一応、鏡で身嗜みをチェックする。
「よし」
表情以外、特に問題は無い筈だ。これで支度は整ったが、待ち合わせまではまだ少し時間が余っていた。
「……アニメ見よ」
当然の帰結である。
ちなみに、母にこの格好を見せた所、再度愕然とされた。娘がスカートを履いただけで、何故そんな反応をするのか。これがわからない。

調べた所によると、ライブハウス「ＳＰＡＣＥ」とはガールズバンド界隈では聖地と呼ばれる程有名であるらしい。
さて、そんな場所の入口に今私は立っている訳だが、知らない店に入るというのはどうにも緊張してしまう。それに、ライブハウスなどという施設とは一切縁がなかったので、少し恐怖さえ感じる。
取り敢えず入店してみると、受付らしき所に老齢らしき女性が座っていた。バイトにしては威厳が満ち溢れているので、店長だろうか。
「すみません。ライブ見に来たんですけど」
「高校生かい？」
「はい」
「６００円」

安いかどうかは比較する対象が無いので何とも言えないが、この値段でドリンクチケットも付いているというのは、おそらくかなり良心的ではなかろうか。
無事にライブチケットも買えたので、早速香澄を探す事にする。
「さとりーん！」
が、その必要はすぐに無くなった。
「ちょっと遅れた？」
「全然！」
「つーか、香澄が早すぎだっつーの」
なんでも、二時にはもう市ヶ谷さんの家に来ていたとかなんとか。らしいと言えばらしい行動である。
「あ、さーや結局ダメなんだって」
「そうなんだ」
やはり休日のパン屋は忙しいのだろう。
「牛込さんは来るんだっけ？」
「うん。りみりんのお姉さんがやってるバンドが来るんだよ！」
「へぇ」
「Ｇｌｉｔｔｅｒ　ｇｒｅｅｎっていうバンドなんだけど……」
「グリグリ？」
「知ってるの？」
姉が良く話をしてきたが、私は殆ど名前しか知らない。
「姉の友達がそのバンドのメンバーで」
「へー……そういえばさとりんって楽器店に居たよね？」
「あぁ、うん」
「もしかして……楽器、やってたり？」
「まぁ……一応、ギターを」
なんだろう。香澄の次の言葉がはっきり分かってしまうのだが。
「じゃあ！一緒にバンドやらない!?」
「節操ねぇなお前……」
やはりか。誘い自体は嬉しくないこともないのだが、残念ながら既に答えは決まっている。

「お断りします」
「そんなぁ……」
「まぁ、前にも断ってるし、それに……」
そう大した理由ではない。
「それに？」
「あのギター、元々私のじゃないんだ」
未だに私が執着しているというだけだ。

ライブというのは初めて経験するが、確かに普通に曲を聴くのとはまた違った魅力が有るように感じる。
「イエーイ！」
しかしまぁ、隣の彼女程は盛り上がれそうにない。
「ありさありさ！イエーイ！」
「はいはい」
「ほら、さとりんも！」
「そこまではちょっと」
「えー……」
私にそのテンションを要求するのはちょっと勘弁して欲しい。それにしても、そろそろ牛込さんが現れてもおかしくないと思うのだが、姿が見えない。
「りみりんどうしたんだろうね？次グリグリだよ？」
「姉ちゃんの所にでもいんじゃねぇの？」
結局、牛込さんの姿は無いまま、次のバンドが出てきた。が、そこに鵜沢さんの姿は無い。
「あれ？」
「ちがくね？」
二人の反応を見るに、やはりあのバンドはグリグリではないのだろう。
香澄達はどうやら様子を見に行くらしいので、ついて行く事にした。

「りみりん！」
楽屋へ向かうと、牛込さんが入口のすぐ横で不安そうに佇んでいた。
「お姉ちゃん達、まだ来てなくて……」
「ええ!?」
「昨日まで修学旅行で、台風で飛行機遅れて……今向かってるけどライブにはもう……」
なんとも間の悪い話があったものだ。
「来るまで待つのは？」
「駄目！」
後ろからそう言ってきたのはあの時、受付に居た老齢らしき女性だった。
「何があろうとお客さんを待たせるのは駄目！それだけは……やっちゃいけないんだよ」
確かに、長く客を待たせてしまえば、元の盛り上がりを取り戻すのは難しいだろう。結局、後残っているバンドでどれだけ引き延ばせるかという話になるのだが……
「ＳＰＡＣＥ！最後までありがとー！」
本命はやって来ないまま、遂に最後の演奏が終わってしまった。
客が困惑しているのを見る限り、それなりに人気は高いのだろう。だが、その分不満も大きい。
今回は、運が悪かった。仕方ないと言うのが当然であるが、彼女は、そう言うつもりは無いらしい。
流石に緊張しているらしく、いつになく硬い歩調でステージのマイクまで歩き、口を開く。
「こんに……」
マイクに近すぎたか、声が大きすぎたのだろう。会場中に高い音がハウリングした。
間を置き、彼女が再び口を開く。
「こんにちは、戸山香澄です」
こんな時にも自己紹介から入る辺りが彼女らしい。

体の震えを止めるように深く呼吸して、次に彼女の口から出てきたのは……

「キーラーキーラーひーかーるーおーそーらーのーほーしーよー」

そんな、歌だった。まさかのきらきら星である。

「ちょっとっ……何やってんだよ……！」

見かねた市ヶ谷さんが止めようとするが、今の彼女には逆効果ではないだろうか。

「ありさ！」

案の定、香澄は笑顔で市ヶ谷さんの元へ行き、あるモノを手渡した。青と赤の二色に分かれ、子気味良い音を響かせるソレは、ずばりカスタネットである。

「はぁ!?カスタネッ……」

「ありさも！」

驚いている内に、無残にも市ヶ谷さんは引っ張られていってしまった。

結果、きらきら星にカスタネットの音が一つ加わったが、静けさも合わさって絵面がシュールだ。

その内香澄が歌い終わってしまったが、すぐまた同じ様に歌い始める。今度は市ヶ谷さんの声も合わさり、微笑ましくなってきたのか笑い混じりに応援する客まで出てきた。

そんな彼女らを見て何を思ったのだろう。

「すみません！ベース、貸してもらえませんか！」

牛込さんが真剣な表情でそう言った。

「牛込さん、行くんだ？」

「うん……」

ベースを持つ彼女の体は、まだ少し震えている。

「大丈夫」

「え？」

「恰好いいよ、頑張って」

「うん……！」

我ながら助言というにも烏滸がましい言葉であるが、まぁ、お節介

というのは自分がしたいからするものだ。
彼女なら、私の言葉など無くても前へ進めただろう。
それに嘘は言っていない。現にああしてベースを弾く彼女が、きっと今この場で最も輝いている。
ベースが加わると途端に音楽らしくなるのだなと、少し感心した。単純に三つの音が重なっただけなのだが、バンドの魅力というのは存外、そういう所にあるのかもしれない。
そうして三回目のきらきら星が終わった直後である。
「お待たせ！」
ようやく、本命のご到着らしい。
そこからは、グリグリのライブにあの三人を加えたまま本日四回目のきらきら星が始まり、会場は大きな盛り上がりを見せた。
何故か私も行くかと聞かれたが、それはあまりにも無粋であろう。
あれは完全に彼女達の舞台であって、私が入れるような物では無かった。別にそこに不満はない。ただ、あの心の底から楽しんでいるような表情は、少し羨ましく思う。

「お疲れ……どういう状況？」
「えへへー」
「重い……」
「ご、ごめんね有咲ちゃん！」
様子を見に来たら三人とも床に倒れていた件について。まぁ体勢的に、市ヶ谷さんに二人が抱きついたまま崩れ落ちたといった所だろうが、どういう流れでそうなったやら。
「ＳＰＡＣＥ」を出た後も興奮冷めやらぬ様子で、香澄はライブの感想を語ってくれた。牛込さんもメンバーに加わったらしく、今の彼女は実に順風満帆という感じだろう。
「よぉーし！次は文化祭だー！」
「え？」
しかし、今後の予定ぐらいはメンバー間で共有しておいた方が良い

のではなかろうか。